

まちの保健室

脇野 千恵

まずは、科学的な視点で！

共に2年生の所属になったM先生との学校生活が始まりました。生活科の中に位置づけた性教育の研究と教材作りに専念する毎日でした。

その当時の低学年の性教育のテーマは、「からだを清潔に！」・「命の大切さ」でした。年間2時間、主に参観日をねらって授業公開されていました。

からだの洗い方などから、自分のからだを清潔にすることの大事さを教えます。

「命の大切さ」では、みんなの命はお母さんから生まれてきたこと。児童一人一人の家の人から、生まれてきたときのエピソードの手紙を書いてもらい、みんなで共有する授業です。「お母さんが産んでくれたんだよ。大変だったんだよ。家族もとっても喜んでくれました。」と言っていました。写真を持ってこさせていた時もありました。子どもたちには、生まれてきて良かった、だから命は大切にしようと思わせる学習でした。

しかし、M先生と性教育について議論するうちに、「それっておかしいよね？」とい

う結論になりました。本当にお母さんは産んで良かった、子どもは生まれてきて良かったと思っているのかな？家族には色々な形態があるのだから…。

M先生からは前任県での人権学習の研究などから学ぶことが多く、彼女の人を人として見る鋭さに引き込まれていったものです。そこで新たに性教育の学習計画に取り組むことになりました。

まず、子どもたちへのアンケートをしました。「みんなのいのちは、どこから来たのかな？」「どうやって生まれてきたのかな？」という質問をし、文章で書けない子には、絵で描いてもいいよと投げかけました。子どもたちは、実に色々なことを書いていました。今でもそうですが、家庭での性教育はなかなか実践されていない状況です。ちゃんとした答えを書く子はいませんでした。知識のない子どもたちの実態から、今の時期にこそ、ちゃんとしたことを教えるべきだと考えました。

その頃、私は性教育の民間の研究団体で学び始めていました。その研究会では、できるだけ幼少期から科学的なからだの学習を教えることをテーマにしていました。

行き過ぎた性教育？

M先生と計画した学習内容です。

①「たいせつなわたしたちのからだ」

ヒトのからだの外から見える部分の目や耳、口、髪の毛、手、指、などの働きについての学習です。

例えば、睫毛や眉毛の働きについて語ると、子どもたちは「へえー」と感動してくれます。ただし、色々な事情で障がいを持つ人もいますので、そこは配慮が必要です。そして、女の子と男の子の違うところ気づかせ学びます。学習中の子どもたちの関心事は、やはり性器の部分です。恥ずかしがったり、喜んだり大騒ぎです。なぜか男子の性器の愛称として「ちんちん」という言葉があるのに、女子の性器の愛称はありません。卑猥な言葉は色々あるのに…不思議ですね。

※今は、LGBTQという多様な性別があり、男女だけに限らないことを学ぶようになっていきます。

②「命の誕生」

人の命ができる仕組みについての学習です。児童の事前アンケートを提示しながら、実は『お母さんの命の元と（卵子）お父さんの命の元（精子）が合体して、あなたたちの命ができたんだよ』と語ります。

子どもたちは、新しい事を学ぶと次々に色々な疑問を投げかけてくれます。小さい子が、「なんで、なんで？」とうるさく言うのと同じです。この学習をすると、必ず子どもたちの誰かが、『先生、どこで合体するの？』と質問します。（この言葉が出ることをねらって仕組む授業ですが…。）さらに『どうやってするの？』、『いつするの？』まで出てきます。

ここでの学習のメインは「性交」を教え

ることです。科学的に正しくが基本ですが、どのような絵（あるいは図）で提示し説明するかが大切な課題です。

「人の命は、お母さんの体内にある子宮という部屋に、お父さんの命の元を送り込むことでできる。そして、お母さんの膣口から生まれてくるんだよ」と説明します。（生まれ方には色々ありますが…）

性交のことをセックスとも言うので付け足しますが、本来セックスは性別の意味です。「性交」のテーマは奥が深く、成長の段階によって伝え方が大きく違ってきます。

小学校2年生でもセックスという言葉に反応する子もいますが、ほとんどの子どもたちは、素直に「なんや、そうやったんかあ」といった表情を示します。なぜなら、自分がどうやって生まれてきたのか？という疑問に答えてもらったからです。自分の存在を意識する大切な時期です。父や母がいない子も、みんな同じようにそうやって生まれてきたことに、安心感を持つことができます。科学的な事実を伝えることの意味がここにあります。



教材として選んだ絵本があります。

『せっくすのえほん』という絵本は、28年以上前のものですが、やさしくほのぼのとしたタッチの絵を大きく紙芝居にしました。絵本の冒頭部分は「あなたは畑で生まれたの?」「卵から?」「おもちゃ屋さんで買ってらったの?」といった言葉から始まります。子どもたちは「そんなはずない、ちゃうちゃう!」と大盛り上がり。ただ、「お母さんとお父さんが結婚して、赤ちゃんができた」という部分は、今の時代にはそぐわないかもしれません。



もう一冊『あかちゃんはこうしてできる』というオランダの絵本があります。私自身の3人の子どもたちに毎晩読んで聞かせたものです。ヨーロッパでは早い時期からこのような本で子どもたちが学んでいたのですね。「あかちゃんはこうしてできる」という題名が好きです。

どの学習もそうですが、子どもたちに提示する教材は、十分に配慮しなければならないと思います。授業のめあてとかけ離れてしまい、事後の感想を読みがっかりすることがあります。特に性教育の学習では、絵であれば人物の表情、色合いなど。図であれば、正しく描かれているか。理解できるものか。何度も試行錯誤しながら授業案を考えました。

これらの性教育の学習実践は、子どもたちと共に学ぶ良い機会となりました。保護者の理解も得ることができ、学校での性教育の必要性を強く懇願されました。

しかし、M先生と私の一番の悩みは、管理職、同僚からの授業内容への反発でした。大きな原因は、「性交」を教えたことです。学習指導要領の逸脱?

子どもが性交したらどうする?

行き過ぎた性教育そのものだ!

この時から、私の性教育実践の険しい道のりが始まりました。

つづく